

街道を歩く

下街道 名古屋-勝川-坂下-内津-池田-高山-土岐-釜戸-竹折 (約 14 里)

- 01 伝馬町札の辻—大曾根—勝川橋
- 02 勝川橋—鳥居松—大泉寺
- 03 大泉寺—坂下—明知
- 04 明知—内津—多治見市前畑
- 05 前畑—生田峠—土岐市高山—肥田
- 06 土岐市肥田—瑞浪市一日市場—名滝
- 07 瑞浪市名滝—釜戸—恵那市竹折—横ヶ根

街道筋の主なみどころ

横井也有句碑 : 72 才の時門下長谷川三止の招きで
大曾根、勝川經由内津へ
日本武尊ゆかり : 土岐、内津、西尾、明知、神屋
土岐氏ゆかり : 一日市場、土岐(瑞浪)
尾張藩ゆかり : 名古屋城下、春日井
美濃焼(志野、織部、黄瀬戸) : 多治見、土岐、瑞浪
明治天皇行幸経路 : 竹折から鳥居松 行在所、小休所
馬頭観音 : 街道沿い多数。6・7 世紀に日本に伝えられる。鎌倉時代馬は戦闘力として信仰盛んになる。江戸時代家畜守護神、道中安全の菩薩として信仰、普及される

下街道ルートは中世時代からの物資輸送の重要な古道であった。近世になり尾張藩が中山道へ通じる道路として木曾街道(名古屋—小牧—善師野—土田)の開発、下街道ルートの整備(釜戸—横ヶ根間このとき開通)をした。木曾街道を公道したので“上街道”、それに対する呼称として“下街道”と言われるようになった。

下街道は名古屋と中山道を結ぶ脇往還として宿場もなければ、関所もなく自由に往来できる庶民の道であった。

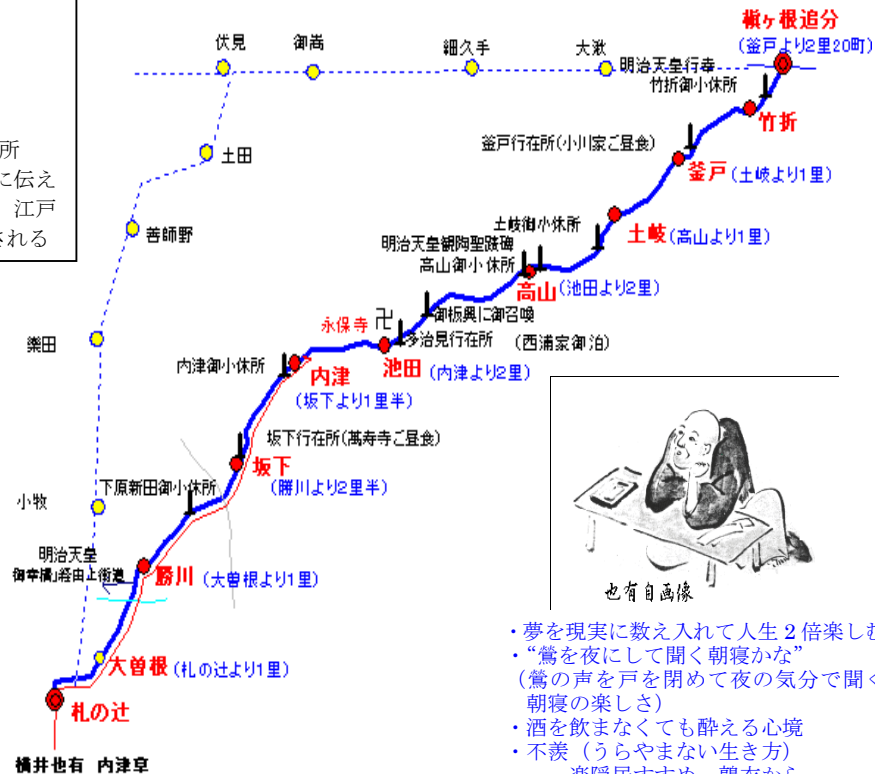
ルートは、横ヶ根の追分から中山道と分れ、竹折-釜戸-土岐-高山-池田-内津-坂下-勝川-から名古屋に通じ、中山道(大湫-細久手-御嵩-伏見-土田)上街道經由より約 4 里(15km)短く、起伏も少なく、手間のかかる荷継ぎ、馬継ぎもなく、さらに運賃が安かったので物資輸送としてよく利用されていた。また、善光寺参り、伊勢参り、御嶽講などの旅人の道として定着していた。

上街道は、公用の荷物、役人の通行が優先されたので庶民は敬遠。尾張藩山村氏、千村氏などは自前で人馬調達して沿道に迷惑かけないようにして下街道を通行していたことから利用する人が少なかったようだ。

下街道の利用が活発になることは上街道の各宿場にとっては荷が減り、旅人が減り駄賃、宿賃稼ぎができず死活問題であった。そのため寛永元年(1624)小牧、善師野、土田の宿連名で“下街道の商人荷物通行禁止”の訴状を出した。藩もそれに対応した規制を出したが守られず、その後幕末まで何度か“訴状—規制”が繰り返されたが十分な成果をあげることは出来なかった。(後に山村氏、千村氏の特例も廃止される)下街道利用の最大の理由は距離が短い・早い・規制が少ないことであった。

下街道は官道の指定がなかったので宿駅はあっても問屋、人馬継立ての設備は貧弱。道幅は 2・3 間と狭く、災害等の維持管理も大部分自前であった。街道には土岐川を始め肥田川、妻木川、生田川などがあり橋賃も馬鹿にならず、また洪水などで渡ること出来ない時もあった。明治 13 年明治天皇の行幸経路が下街道に決まると大改修工事が行われ、以後利用が更に高まった。しかし明治 33 年名古屋—多治見間に始まった中央線の開通とともに新時代を迎える。

(参考: 庶民の道 下街道 —善光寺道)



- ・夢を現実に数え入れて人生 2 倍楽しむ
 - ・“鶯を夜にして聞く朝寝かな”
(鶯の声を戸を閉めて夜の気分で聞く朝寝の楽しさ)
 - ・酒を飲まなくても酔える心境
 - ・不羨(うらやまない生き方)
- 楽隠居すすめ 鶯衣から

横井也有
元禄 15 年(1702)尾張藩重臣横井時衡の長男に生まれる。本名時般(トキヲ)。寺社奉行。祖父の影響で俳諧の道に入る。53 歳で隠居。軽妙洒落な俳文家。天明 3 年(1783) 82 才で没

参考文献

- ・桃花台中日文化センター”街道を歩く”講座テキスト
- ・下街道を歩く 春日井市文化財友の会発行
- ・庶民の道 下街道 善光寺街道 春日井郷土史研究会発行
- ・愛知県歴史の道調査報告書VI 下街道 愛知県教育委員会文化財課
- ・歴史散歩シリーズ 岐阜県の歴史散歩 山川出版
- ・「鶯衣の心」楽隠居のすすめ 横井也有/岡田芳郎
- ・その他 市町村発行観光・歴史パンフレット

H14/10-H15/3

あきやま ゆたか

H15 年 5 月